
モンスターハンター ～異世界から来た太陽～

Mt.KOBURA

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

モンスターハンター

～ 異世界から来た太陽～

【Nコード】

N9619Y

【作者名】

M t . K O B U R A

【あらすじ】

ここは、私立名秋学園　この学園に在学している七海　紅葉は、成績優秀、運動神経抜群のだが、物事にいまいち真剣に取り組めないでいるのだった……しかし、そんな彼にも一つだけ熱心に取り組める“もの”があった。

それは“モンスターハンターポータブル”

そして、彼の幼なじみの、赤羽　栞、鳥田　良、村地　蓮と一緒に登校している時に“それ”は起こったのだった……

この作品は、作者の処女作ですので、駄文、文法崩壊要素を含んで
おりますが、それでも、よろしければ、ご覧下さい。そして、もし
よろしければ感想、アドバイス等も受け付けておりますので、よろ
しく願います。

第1話：嵐の前の静けさ（前書き）

こんばんは!!

夜だけど、初投稿でテンション上がりまくり
のKOBURA
です!

今日が初投稿ですので駄文、文法が成り立っていないのであらかじめご了承ください

それでは、記念すべき第1話
始まり始まり!!

第1話：嵐の前の静けさ

Hello!! 俺は七海紅葉!! キラッキラの中学生だ!

……はあゝ、たりいゝ

このテンションマジできつい……

分かる?俺超燃え尽きてんの。

だって、朝からこのテンションつて……

でも、一つだけ熱心に取り組めるゲームがあるんだ!!

その名を“モンスターハンターポータブル”

俺がこれまで、やってきたゲームの中でも特に面白い!!って俺が絶賛するくらい面白い!!

???「おーい、紅葉〜!」

ちなみに今の声は俺の幼なじみでありながら、

モンハン仲間でもある“赤羽 栞”だ。

栞「紅葉!私やっとジンオウガ倒せたよ!!」

……朝からうるせえ〜〜(怒)

ちなみに今、会話にでたジンオウガってのは

モンハンに出てくる4足歩行で電気を操るモンスターね(誰に説明してんだ?俺!?)

……つーかジンオウガなんてとつくに倒してるし……

栞「ねえ、紅葉、聞いている!?!」

紅葉「ああ、聞いている聞いている?」

栞「何そのは「おーい、おっふた〜りさ〜ん!」ん?あつ!!良と蓮」

今、会話にでた良と蓮も俺の幼なじみでモンハン仲間。

「ねえねえ、聞いて!!私やっとジンオウガ倒せたよ!!」

良「おお、よかったじゃん!!」

蓮「…遅くね？」

栞「む！しょうがないじゃん！もともとああ

いうゲーム苦手だし！」

紅葉「…苦手ならやんなよ…」

栞「えー！だって、みんなと話が合わないの

嫌だし」

面倒くさい性格…

良「なーなー、そんなことよりさ、歩きながら

でいいから、モンハンやろうぜ！」

栞「あ！私も！私も！」

蓮「俺も！」

良「紅葉は？」

紅葉「やる…。」

こうして俺たちは学校に行くまでモンハンをやることになったんだけど…まさかあんなことになるとは今の俺たちじゃ予想すらつかなかった…

第1話・嵐の前の静けさ（後書き）

どうぞでしょうか！？

感想などお待ちしております。

第2話：謎の黒い穴（前書き）

こんばんは〜

テンション高いうちに2話目投稿です。

まあ、こんなにテンションが高いのは、今日でテストが終了だから

（こんなときに勉強せずに執筆している私はダメ人間　テヘツ）

まあ、テストの話はこんくらいにして

それでは第2話　「謎の黒い穴」

始まり始まり〜

第2話：謎の黒い穴

みんなで歩いて10分 やっと学校が見えてきた
グレーの校舎 校庭には朝練が終わって燃え尽きている生徒たち
あれが俺たちの通っている私立名秋学園（ちなみに県内で一番頭の
いい学校だって 自慢じゃねえぞ^^）

さて、おそらく校門には…いた 源田だ…

あつ、源田っていうのは、生徒指導の先生で

名秋学園では生徒に一番嫌われている先生ね

（最近俺、誰に説明してんだ？）

紅葉「おい、お前ら 源田がいるから、そろそろ…」

俺が言いかけた瞬間、キーンと耳鳴りのような音が聞こえて
きた。

紅葉「なんだこの音？耳鳴り？」

良「紅葉、お前も聞こえるのか？」

紅葉「え！？お前も！？」

蓮「俺も聞こえるぞ」

栞「私も」

紅葉「周りの様子を見る限り、耳鳴りは俺たちだけみたいだな。」

良「ああ。でも、なんで…？」

良「言い終わった瞬間、耳鳴りが急に止まった…」

蓮「あれ？止ま…」

その時、突然ギョオオオオと変な音があった。

良「な、なんだこりゃ！？」

紅葉「（一体、どうなってやがる…？）」「

バコッ

容器を潰したような音が聞こえた瞬間、校門に突然黒い穴が出現した。

良「うわっ!!」

蓮「なんだ、ありゃ!？」

栞「ど、どうなってんの!？」

紅葉「周りの奴等は気づいてねえみたいだな…」

紅葉が言い終えたあと、突然4人の身体が光始めた

良「なっ!？」

蓮「う、うわ!？」

栞「きゃあ!!なにこれ!？」

紅葉「まだ、誰も気づかぬえのか!？」

そう、まだ誰も紅葉たちの異変には気づいていない。

その時、4人の身体が一際強い光を発した瞬間、突然4人の姿が消えてしまった。

しかし、そのことに気づくものは、誰1人としていなかった……。

第2話：謎の黒い穴（後書き）

どうでしたか？

感想などよろしく願います。

第3話：ジャギイの群れとドスジャギイ!?（前書き）

こんにちは

テストが、終わってウキウキルンルンの
Mt・KOBURAです!!

いや、テストって嫌ですよ。

今年は高校受験なんで勉強やるうとは思ってんですけどね。
中々、上手くいきません

さて、それでは第3話「ジャギイの群れとドスジャギイ!!」
始まり始まり

第3話：ジャギイの群れとドスジャギイ！？

??? side

来たか…

……

そのように…

さて、次の太陽はどれほど輝くものか…

楽しみですな…

??? side

うん？ここはどこだ…？

??? 「…いつ、起き…」

だ、誰だ…？

??? 「…いつ、起きろ…！」

…ちっ！うるせえなあ…！

??? 「おい、起き…ゲフッ…！」

良side

俺が目を開けた時、目の前に広がった光景はなんとも言い難い光景だった。

良「な、なんだ…ここ?」

目の前に広がるのは新緑の森、悠久の崖、小鳥のさえずり、遠くから聞こえる何かの咆哮

良「ど、どうなってんだ!？」

確かにさっきは、学校の通学路で4人とモンハンしながら、歩いてた筈…!？」

良「そ、そうだ!!みんなは!？」

周りを見ると、3人とみすぐ近くにいた よかった…

良「おいっ!?!みんな大丈夫か!？」

紅葉「うう…」

良「紅葉!?!おいっ!!大丈夫か!？」

紅葉「うっ…うっ…?」

良「おいっ!!起きろ!!」

良「おいっ!!起きろ!!起きろ!!」ゲフツ!!」

えっ!?!なんで!?!なんで殴られんの!?!っ!?!顔!?!しかもゲパン!?!」

紅葉「っ…なんだよ、耳元で怒鳴りやがって…」

良「いや、俺は起こそうと…」

蓮「うう…」

栞「う…ここは…?」

良「おおっ、二人とも気がつ「うっせえ!!」…」

なあ、俺キレていいよな いいよね だって、俺だけおかし

じゃん(涙)

紅葉「ん?何泣いてんの?」

良「うっせえ!!…うっせえ!!」

なんで、俺だけ… あっ、でもさすがの紅葉も心配くらいしてく…
紅葉「んなことより、ここ何処だ?」

うん、軽く受け流されたね…

栞「あれ、さつきまでゲームやってたのに…」

蓮「つーか、バッグとかみんな無くなってるね？」

栞「あつ！ほんとだ！」

紅葉「まあ、んなもんどうでもいい　んなことより、ここは一体どこだつつー話だ」

良「少なくとも、日本じゃねーよな」

栞「うん…うちの近くにもこんなところないよ」

紅葉「やっぱ、さつきの黒い穴が原因か…」

蓮「つーか、このまま、帰れんかったら、どうしよー」

さすが、蓮だな　意味わかんないことに来ても全く動じてない

栞「もー、そんなこといわないで！ー！」

蓮「あゝ、悪い、悪い」

紅葉「さて、それにしても…？」

良「どした？紅葉？」

紅葉「…歩くぞ…」

良「はあ？どうしてまた急に…」

紅葉「雨が降る」

栞「えつ！？ほんと！？」

紅葉「ああ…西の方角に雨雲が見える…」

そんなの、全然見えないんですけど…

「まあ、あと1時間くらいで降るからそれまでに人のいるところを見つめるか、洞窟でも探す…」

良「？どした？」

紅葉「なんか、足音が聞こえる…」

栞「えつ？そんなの聞こえないけど…」

紅葉「シツ…」

紅葉が人差し指を口の前にやる…

紅葉「ん？」

蓮「なんか、分かったの？」

紅葉「ああ、この足音は…人間じゃない？」

朶「えっ!？」

紅葉「なにか、二足歩行の生き物が50匹くらいしかも、かなり大きい…」

良「はあ?なんだよそれ？」

朶「ね、ねえ!!あれ!!」

朶が指を指したところを見ると確かに二足歩行で薄い紫の蜥蜴のよ
うな生き物が崖を上っているのが見えた

良「な、なんだ!?!ありゃ!?!」

蓮「これって…やばくね?」

朶「に、逃げようよ…」

紅葉「駄目だ!あれじゃすぐに追い付かれる」

朶「じゃあ、どうすれば?」

紅葉「…俺が…囷になる」

朶「な、何言ってるの!?!」

良「正気か!?!」

紅葉「俺は、至って、正気だ… それに、ここで4人とも全滅する
より、一人が囷になって、残った奴等がこの先にある村かどこかで、
このことを知れば、最終的に被害は少なくなる…」

良「だからって、お前が犠牲になることなんか!?!」

朶「そうだよ!!一緒に逃げよう!!」

しかし、紅葉は崖下にいる蜥蜴から、目を離そうともしなかった

蓮「…任せて、いいんだな?」

朶「蓮!?!」

紅葉「…ああ」

蓮「…分かった…」

良「おい蓮!!お前、仲間を見捨てんのか!?!」

良が蓮の胸ぐらをつかむ

蓮「紅葉は間違ったことは言ってないし、おそらく紅葉なら、あの
程度なら…」

良「？あの程度？どういうことだ！？」

蓮「……」

紅葉「いいから！」

紅葉が声を荒げて言う

紅葉「ここは、俺に任せろ……」

良「！？……っ！！」

栞「紅葉……」

蓮「……」

良「っ！！くそ！！必ず追い付けよ！！！」

栞「紅葉！あんなのに負けないでね」

蓮「任せたぞ」

みんな、紅葉の意見に納得したようだ

紅葉「ああ！！必ず追い付け！！！」

紅葉が、言い終わって安堵したのか、みんな、一斉に蜥蜴が走って

いる道とは、反対の方向を駆ける

紅葉「……行っただか　さて、そろそろご到着かな」

紅葉のいった通り、紅葉の後ろには大勢の蜥蜴がいた

紅葉「ふっ！久しぶりの実戦か！前の実戦からは6年振り　腕が鈍

っていなければいいが……」

紅葉が、言い終わった瞬間、群れの中でも一際大きい蜥蜴が突然鳴

きだした

どうやら、紅葉を敵と判断したようだ

紅葉「ふっ！その程度の殺気か　他愛もない」

蜥蜴「ギャオツオウオ」

紅葉「さあ、行くぞ！！！」

紅葉と蜥蜴が動きだした

しかし、その間に入る影

???「ふふ　少しは楽しませてくれるかな」

チャキツと刀を抜く音が聞こえた……

第3話：ジャギイの群れとドスジャギイ!? (後書き)

はい、第3話終了です

あつ、もちろん紅葉はまだ死にませんよ!

ていつか、ここで死んだらこの話もう、終わっちゃうってww

あつ、それと次回からはここにキャラクターのプロフィール載せていきますんでそこそこよろしくです。

では、感想など、お待ちしております

第4話：竜人族の少女（前書き）

こんにちはー

M t . K O B U R A です!!

いやー、一日に2回投稿ってきついですねー！

でも、まあ、基本的に僕は暇人なので、

こんなことは、しょっちゅうあるんで

よろしくですー

それでは、第4話「竜人族の少女」

始まり始まり〜

第4話：竜人族の少女

??? side

崖下を見てみると、4人の子供が、なんか動揺？っていうか、困惑した表情をしている。

…うん！今のあたしなら、多分顔見られずにあの子たちを殺れるね

ん？あの子たちのさらに崖下に…ハハーン

この気配はジャギイの群れとドスジャギイか

こりゃ、間違いなくあの子たち、食い殺されるね

でも、あの赤髪の少年は、とっくに気づいてるな……一時間後、雨が降ることもね

おっ 来た来た 紫蜥蜴

ん？…ふーん、あの赤髪の子、殿務

めるんだ…それに、結構殺気出てるね なんか、気持ちよくなってきた

ふふ ちょっと、興味出てきた

紅葉 side

まずは、3体小さいのが、出てきた…殺気をぶつけてみたが、怯んでもすぐに向かってきた。

おそらく、あの一際でかいのが、親玉…んで、そいつが指令を出してるのか…どおりで、妙に統率が取れているのか…だが…

スパアーンツ！！

俺の周りを、間合いを取るかのようにぐるぐる回っている蜥蜴を手
刀で頸動脈を切る

それだけで、一匹の雑兵の命を刈り取った…

「ギヤオツ！？」

それだけで親玉は、驚いている……この程度で驚くのでは……お前
は首領失格だ！！

????side

うそっ！？まさか、武器を使わずにジャギイを倒すなんて…いくら、
ジャギイが小型モンスターでも、手だけで、倒すのはかなりきつい
し…

ふーん、これはかなり興味出てきたよ…

でもまだ、余裕そうだから、もう少し見てるかな

紅葉side

ハアハアツ、クソ！！まだいるのか！！

現在、俺の周りには20匹くらいの小蜥蜴が息絶えている。

だが、これだけ倒しても、まだ半数の小蜥蜴と、首領が、残ってい
る。

それに、もうひとつ厄介なことがある。

それは、一撃で殺せなくなったことだ…

さつきから、的確に頸動脈を狙えなくなってきた。もちろん俺の疲労が原因でもあるが、もうひとつ俺が頸動脈を狙えない原因があった。奴等が、攻撃の瞬間に身体をずらしてくるのだ…

俺の推測だが、あの首領が俺の攻撃パターンを記憶して、それを雑兵に伝えていているのだ

それを聞いた雑兵どもは、俺が攻撃する瞬間に、身体を数mmずらして急所をずらす

クソ！敵ながらなかなか天晴れなことだ…

そんなことを考えながら、戦っていると、当然小蜥蜴以外に注意がいかない

俺は、小蜥蜴の攻撃をかわす際、小石のつまづいて、転んでしまった紅葉「しまっ…!?!」

俺が転んだのを好機と見たのか、一斉に飛びかかってきた。

クソ！！いくらなんでも、こんな大人の体重とほぼおなじような奴等が一斉に飛びかかってきたら、あっという間に圧死してしまう！！

クッ！！ここまでか…みんな、ごめん…

「ふふ 少しは楽しませてくれるかな」

俺が、諦めて目を瞑ったら突然少女の、声と

「ギヤアッ！！」

小蜥蜴の断末魔らしき声が聞こえた…

???side

あつ！やばつ！あの子かなり、疲れてる。

でも手だけで倒した数は23頭か…ふーん、これはかなりすごいね
うん今すぐ目の前にいって拍手したいくらい、いやマジで！

だって、武器も使わずにジャギイを23頭倒すって人間やめてるで
しょ（笑）

あつ！つまづいた。しょうがない、やっと私の出番だね！ふふ 興
奮してきちゃった

紅葉 side

いきなり、俺の前に現れて小蜥蜴を切り伏せた女、一体何者だ？
しかし、よく見てみると見た目が俺らと何かが違う！

まず耳が尖ってる つーか、これってモンハンにもあつただけ
ど……えっ！？ここってまさかモンハンの世界！？じゃあ、さつき
のはモンスター！？でも、俺は、見たこと…あれっ…あー…
！！分かった！！これ、ジャギイか！？つーか、俺目悪いから全く
わからなかった

。だつてさ、こつちの世界に来たら眼鏡もなくなつてんだもん！！
マジでアリエンティ

えっ！？じゃあ、どうして、女の耳が尖ってるって分かつたって？

予備の眼鏡が尻ポケットにあつたんだよ！集中しすぎて気づかんか
った。でも、この世界に来たときは、そんなもんなかったと思
うが…まっ、いいか。

にしても、耳が尖ってるってことは、この女竜人族か？

????「ねえ、大丈夫？」

紅葉「ん？ああ、大丈夫…」

立とうとした瞬間立ちくらみが起こった

どうやら、想像以上に身体を酷使してしまったようだ…

???「ちよつと！全然大丈夫じゃないじゃん！！…いいよ。私があいつら殺るから」

……なんか今、あどけない顔の少女の口から“殺る”とか、聞こえてきたんですけど…

でも、竜人族だから、おそらく2〜300年は優に生きている筈だけれど…

でも、

???「とりあえず、君は座ってなよ あいつらなんて余裕で倒せるから」

何故か、この少女からでる言葉は信頼出来るものの声だった…

紅葉「（俺って、初めてあった奴は、基本的に欠片ほどの信頼もしないんだけどね…、でも、まっ、いつか）」

そんなことを考えていると女は、背中に背負っている刀？いや、この世界じゃ、太刀か？を抜いていた

紅葉「（あの、刀は夜刀【月影】…へえー、なかなかできるんだな）」

???「さて、始めるか」

女は楽しそうな、今から、お遊びでも、するかのような声ではつきり言った

???「殺し合いを」

宴が始まった瞬間だった…

第4話：竜人族の少女（後書き）

登場人物紹介

File 1

名前：七海 紅葉

年齢：15歳

血液型：B型

誕生日：2月11日

身長：174cm

体重：65kg

私立名秋学園3年生 成績優秀、運動神経抜群だが、面倒くさがり屋のため、必要以上に友達は作らない。しかし、顔は結構イケメンなので七海紅葉ファンクラブがある。髪の色は赤。視力は右が0.1 左が0.03なのでかなり度の強い眼鏡をかけている。

殺気を感じとることができるとは、ジャギイを素手で倒したその実力から、過去に何かあった模様…。

赤羽 栞、鳥田 良、村地 蓮とは幼い頃からの幼なじみである。

どうでしょうか？

今回はいつもより（とはいっても、まだ3話しか無いけど）長めに

してみました。

プロフィールに関しては、やっぱり下手くそですね。

紅葉の過去については、番外編で書くか、話の後半で書くかは、今後、考えていきます。

それでは、次回もすぐに投稿すると思うので、よろしく願いします！

第5話：雨に打たれる孤高の狼（前書き）

こんにちはー

M t ・ K O B U R A だーす！

今日テストが返ってきました

……………死んだ

いや、冗談抜きで！！だって、合計500点中300点もいかない
ってマジでヤバい！！

つーわけで、次回から更新速度が遅くなりますのでご了承くださいませ。

それでは、第5話「雨に打たれる孤高の狼」
始まり始まり〜

第5話：雨に打たれる孤高の狼

紅葉 side

勝負はあっという間についた。

竜人族の女は俺たちを困っていたジャギイ数十頭をあっという間に切り伏せた

しかも、一撃で首を落として。

紅葉「（化け物かよ…）」

はつきりいって、お前も十分、化け物だよww

by 作者

紅葉はそんな失礼なことを考えてる内にドスジャギイもあっという間に落ちた。

女のすぐ近くにはジャギイの首とドスジャギイの首が、ある。

紅葉「（朧や、良が見たら、吐いちまいそうだ…）」

今も、女はいかにも、欲求不満そうな顔で刀の血を拭いていた。

「???」「あゝあゝ、なにこれ!?マジで弱くない!!だって、首を斬っただけで、首が落ちるなんて有り得くない!!あゝあゝ、ウオーミングアップにもならなかった…（…あの子と殺りあってみたいなあ）」

竜人族の少女が、そんなことを考えていると紅葉が突然口を開く

紅葉「おい、女ー!」

「???」「ん?なーにー?」

紅葉「お前、名は何て言うんだ?」

「???」「え?私?」

少女は、まるで「なんで、自分?」と今でも言いたげな顔をした

紅葉「お前しか、いねえーだろ?」

「???」「んー?私の名前かー…まっ、いっか

私の名前はリユノ！リユノ・フラヌリーテ！！」

紅葉「ふーん…俺の名前は七海 紅葉な！」

リユノ「そっか、紅葉か…うん！！いい名前だね！！」

紅葉「そんなん、言われたこと、一度もねえけど…」

事実だ…今まで、俺の周りに群がってきた奴等は俺の外見ばかりで、内面を見ようとする奴等は一人もいなかった。

そんな時に初めて俺の内面を見た奴がいた。

蓮だ……………

そこから、幼なじみだった、良や栞とも、仲良くなっていた

いつの間にか俺のファンクラブも出来ていたらしいが、そんな無視した。

そんな中でこうやって、名前を褒めてくれた人は俺にとっては新鮮なものだった。

紅葉「リユノ！さつさと、行こうぜ！！この先に俺のなか「知ってるよ 紅葉が殿になって、3人逃がしたんでしょう？」

なあっ！？こいつ、まさか…

リユノ「うん 全部見てた」

……………ぶっ殺す！！（怒）（怒）（怒）

なんなんだよ、こいつ！！見てたんならさつさと助け…

リユノ「だって、助けなくてもいいって思ったしー？」

……………もう、いいや こいつ、なんか栞と同じ匂いがする（やかましそうだね…）

リユノ「なんか今、失礼なこと考えてなかった？」

紅葉「いいや、別に（めっさ、棒読みww）」

リユノ「ふーん、まあいいや さつ、行こ」

紅葉「（これは、逆らわないのが、吉か…）」

良side

あれから、随分走ったな にしても、ほんとにここは、何処だ？

…何処かで見たと、あるような気がするんだが…

栞「ハッ、ハッ、ハ…キヤッ!？」

蓮「おっと。」

栞が、転びそうな所を蓮が受け止める。しかし…

栞「ハアハアッ…」

栞は、もう限界だ。そりゃ、そうだ。なんの、運動も、していない奴が休みもせずに1、2kmは、走ったのだ。そりゃ、こつもなる。良「…少し、休もうか…」

蓮「ああ、そうしようぜ…」

栞「……………」

もう、返事すら、出来ないようだ

良「しょうがない、10分くらいきゅうけ…」

???「おーい、みんなー!」

ん?誰かが手を振りながらこつちに走ってくる

しかも、一人は…女?

???「おーい、みーんーなー!」

おいおい、あれって、まさか…

紅葉「おーい、返事しろよー」

紅葉!?!あいつ、いつから女を…じゃない!あいつ、生きていたのか!?!良かった…。

蓮 side

ああー、もう走んのめんどいー

良は、まだ大丈夫そうだけど、栞は、そろそろ限界だな…

おっと、案の定転んだ

栞「キヤッ!」

蓮「おっと。」

ふー、ギリギリセーフ。なんとか、受け止めれた。

栞「ハアハアツ……」

おっと、こりゃ重症だ……こりゃ、少しは休んだ方が……

良「……少し、休憩するか……」

良、ナースタイミーング……！まっ、俺もちよっとは、疲れていたけど……

良「しょうがない、10ぶんくらいきゅうけ……」

えっ？10分だけ！？……良って結構鬼畜なんだな……

にしても、どうしたんだ？途中まで言ってる……

……？「おい、みんなー！」

ん？この声は……ふーん、倒したんだ……

……？「おい、みーんーな……！！！」

……紅葉……！！……

栞side

ハツハツ……

私たちが走り始めてもう、20分は経った

って、ていうかなんでこの2人、まだ余裕そうな顔してるの！？

良は、体力バカだから、分かるけど蓮は！？

そんなこと考えていたら、小石につまづいてしまった。

しまっ……！！？

蓮「おっと。」

間一髪で蓮が受け止めてくれた。感謝感激……！！

しかし、お礼を言うほど体力が残っていない

蓮「大丈夫？」

ごめん、もうなんも言えない……

良「……少し、休憩するか……」

えっ！？ほんと！？よかつた？

良「しょうがない、10分くらいきゅうけ……」

えっ！？たった10分！？短っ！？……でも、どうしたの？急にいい

止まって？

「????」「おい、みんなー！」

えっ!?!この声って!?!

「????」「おい、みんなーなー!?!」

もしかして……紅葉!?!

紅葉 side

俺が、走りながら呼んでも、誰も俺だと気づいていない……まあ、
蓮は気づいてるだろうけど

リユノ「あの子たち?」

紅葉「ああ!そうみたいだな」

ちなみに俺が、ジャギイどもから受けた傷は、リユノが回復薬や、
薬草で治療してくれた。いやー、初回復薬だよ そりゃもう、テン
ション上がったね!?!リユノに引かれるくらい……

捕捉: 回復薬の味としては、牛乳を水で100回割ったくらいの味
つまり、不味いつてことね……うう……

ポツポツ……

ん?雨か?ちっ!もう1時間も経ったか……

リユノ「雨:降ってきちゃったね……」

紅葉「ああ……」

俺は特に何も言わずに返事した

それから少し走ってやっとなんなのところにいった。

紅葉「よう、みんな!さつきぶり?」

みんな、何も言い返さない……ちよっ!?!みんな……何も言い返さない
なんて……悲しくなるじゃないか……

スクッ

突然、栞が立ち上がった。ゆっくりこっちに近づいてくる。……も
しかして、怒ってらっしゃる……？

スッ

ついに俺の前に立ち止まった。やべえ……こりゃフラグが……

紅葉「え〜と……しお……」

栞「この、バカあッ!!」

パンツ

グハッ!! うおっ!! やっぱり、来たか ビンタ……
しかし、次の瞬間突然抱きつかれた……

栞「いや、いやだよ……紅葉がいなくなるなんて……」

栞……

栞「もう、あんなこと無茶なことしないで……」

紅葉「栞……うん……ごめん……」

俺は、素直に栞に謝った

紅葉「それと、心配してくれて……ありがとう……」

栞「……ううん……いいよ……あっ、ごめんね! 痛かった?」

紅葉「ちよつと……」

俺は、素直にビンタの感想を述べる。

栞「ごめんね!! 大丈夫?」

栞が俺をさらに心配してきた

紅葉「こんくらいなら、大丈夫!」

……にしても、さっきから思ってたんだけど……

紅葉「栞……」

栞「ん？何？」

紅葉「…そろそろ、離れてくれない？」

栞「えっ!？」

さつきから、栞が抱きついたままなんだ…

栞「あつ、ああ／＼／＼」

やっと、自覚したか

栞「紅葉の…」

ん？

栞「紅葉のバカあー！ー！ー！！」

バキッ

グオツ!!なんでグーパン!?!しかも!顔!?

……理不尽だ……

捕捉…俺が殴られた瞬間な良が口元をつり上げたのを見た俺は速攻で良に八つ当たりするのだった

第5話：雨に打たれる孤高の狼（後書き）

登場人物紹介

file 2

名前：鳥田 良

年齢：15歳

血液型：O型

誕生日：6月3日

4人の中でもリーダー格的な存在。体力バカだが、部活には、入っていない。学校でも、特に同姓からは人気がある。活気溢れる活発少年だ！！

え、まずは、読者の皆様に謝りたいことが2つありまして…

まず一つ目は、紅葉の年齢です。

前の話のプロフィールで紅葉の年齢を15歳と表記してしまったのですが、それだと計算が合わないので、正しくは“14”歳です。

次に二つ目ですが、まさかの狼ことジンウガが出現しませんでした。

次話で必ず出しますのでご了承下さい

それでは、次の第6話もよろしくお願いしまーす！

第6話・続、雨に打たれる孤高の狼（前書き）

……じ、じ…んば…ん…は……

た、ただいま急激な睡魔に教われている

M t・K O B U R Aです…

ちなみに今日の授業で思ったんですけど、校長先生の話ってなんであんなに眠くなるんですかね？

卒業式の眠たさなんてマジ、パネエツすー！！

でも、寝たら目立つし（今年、卒業^^）寝ないとキツいしほんと地獄ですよね〜ww

では、本編いきましよう

第6話：「続、雨に打たれる孤高の狼」
始まり始まり〜

第6話：続、雨に打たれる孤高の狼

紅葉 side

洞窟内…

俺が朶にぶたれて数分後、やっと言わなければいけないことを言った

紅葉「…みんな……」

良「ん、どした？紅葉？」

紅葉「……実はな……」

俺は重い口を開いてはつきり言った

紅葉「この世界はな……実はモンハンの世界なんだ……」

良、蓮、朶「……はっ！？……」

やっぱり、みんな同じ反応だね　まるで鳩が豆鉄砲をくらったような顔をしている

でも、さすがは蓮……すぐに平常心を取り戻す

蓮「……どういうこと？」

蓮が俺に聞き返してくる　まあ、このメンツで今、俺に落ち着いて聞き返してくるのは蓮だけだはな

紅葉「さっきの薄い紫色の蜥蜴…あれは、ジャギイとジャギイノスとドスジャギイだ」

良 side

紅葉「モンハンの世界なんだ……」

………はっ！？……いや、はっ！？つて、えっ！？なんで！？ここがモンハンの世界！？うそー！？

蓮「……どういうこと？」

ここで蓮がみんなが一番聞きたいことを聞く

紅葉「さっきの薄い紫色の蜥蜴…あれは、ジャギイとジャギイノス

とドスジャギイだ」

えっ!?!?…ああ…言われてみれば確かに似てる…

そう、この3人は崖下にいる、ドスジャギイたちを見ただけなのでよく分からなかったのだ…　それでも、とつさに3人を逃がしたのはやはり紅葉の謎の実力なのか…

蓮「言われてみれば…確かに…」

みんな、状況をかろうじて把握している

まあ、無理もないだろう　いきなり異世界にやってきて、来たところがいづもゲームでやっている所に来てしまったのだ　普通の人だったらすぐに気を失って倒れてしまっただろう

蓮「…成る程ね…、状況はなんとなく分かった…で、その女は誰だ?」

ここで、みんなが知りたかったもう一つの疑問を聞き出す　別にリュノ自身は、聞かれたら答えられるところまでは、答えるつもりだったのだが、みんなリュノから話を聞きづらかった

まあ、初めてあった人に分け隔てなく聞ける人はこの4人の中にはいないから無理もないのだが…

リュノ「名前を聞きたいならまずは、自分から…じゃないの?」

蓮「…村地…蓮だ…」

蓮が警戒しながら応える

リュノ「ふーん、意外に素直だね　いいよ　私はリュノだよ」

蓮「あんたが…ジャギイを倒したのか?」

…えっ!?!?紅葉が全部倒したんじゃないのか?

リュノ「…どうしてそう思ったの…?」

蓮「…あんたの体から僅かに血の臭いを感じるから…」

紅葉 side

は〜い、みんな今すんごいピリピリしてるよ

にしても、蓮すげえな まさか、あんな血の臭いに気づくとは…

あんなもん達人でも一流の達人でも気づくか気づかないかだぞ

……恐ろしや〜……

リュノ「…ふーん、君これに気づいたか〜、フフツ」

蓮「……質問に応える……」

蓮が若干怒気をまじえて言う つーか、あとちょっといったら完全に殺気だな さすがは***の息子といったところか…

リュノ「まあまあ、落ち着いて、落ち着いて

質問に応えるから……」

蓮「…フンツ」

蓮が若干怒気をおさめる でも、まだちょっと怒っているな

リュノ「まあ、聞かれた以上質問には応えるよ 確かにあれを倒したのは私だよ ほら、もういい？」

蓮「…ああ……」

蓮もなんとか納得したらしい…ん？

ガラガラッ

ん？何この音？何か引いてる？

リュノと蓮もこの音には気づいているみたいだけど…

リュノ「…これは…あっ！？ラツキー！！」

紅葉「何がラツキーなの…？」

だんだん音は近づいてくる これって、もしかして

蓮「ネコタク？…」

……セリフ取られた……

リュノside

場面が変わってネコタク内

ちなみに疑問？なんで、ネコタク見た瞬間、あんなにテンションあがんの？ネコタクなんて何処にでもあるようなもんだけど……？

それともう一つ、疑問……

リュノ「ねえ、君たち？」

良「ん？どうしました？」

あつ、ちなみにもうみんなとは友達になっといったよ なって損はないしね

リュノ「……モンハンの世界って……何？」

みんなの顔が驚きの、色が変わる
えっ！？私、なんか変な質問した？

紅葉side

ふーん、さてどうしよう……

リュノに聞かれた質問……応えるべきか、否か……

でも、リュノって結構実力あるからなあ……もしかしたら非常時に役に立つかも……

蓮にも目配りしたけど……答えは一緒らしい

紅葉「ああ、それについては……「紅葉……」……なんだよ、良……」

良「良いのかよ！言っちゃっても……」

紅葉「ん、ああ……リュノなら非常時に役に立つかもしれないから……
応ね……」

良「でも……」

蓮「良……」

良「？なんだよ、蓮！！」

蓮「リュノになら話しても問題ない　リュノ程の実力なら話も信じ
てくれるさ」

良「でもそれになんの根拠が！！」

蓮「いいから！！」

良「！！」

蓮「紅葉を信じる……」

良「っ！！……分かった　ごめん……」

蓮「別にいいよ　栞もいい？」

栞「コクッ」

栞も納得してくれた　俺は感謝の意を込めてアイコンタクトをして
おく……じゃあ……

紅葉「話すか……」

リュノside

私は今、超真剣に話を聞く……

にしても、話を聞く限り、信じられないことだらけだ……おとぎ話み
たい　でも……

不思議とウソって感じがしないんだよね

紅葉「……って言うわけなんだけど……」

リュノ「うん……まさかこんなことがあるなんてね……」

紅葉「ああ……俺たちも原因はよく分からないんだけど……」

リュノ「うん……」

紅葉「……信じてくれるか……？」

リュノ「……うん」

紅葉「……ほんとに……？」

リュノ「うん……信じるよ……」

紅葉「……そつか……」

紅葉はこれだけしか言わないけど顔を見るととても安堵しているのが分かる

こんなん見せられたらね…信じるしかないよね…

???「ニヤツ？」

リユノ「ん？どうしたの？」

ああ…今の声はアイルーね　二足歩行のネコ型ロボツ…ゴホンツ…ネコ型モンスターである。

ちなみにアイルーの亜種であるメラルーもいるけどこっちは、ハンターにすごい嫌われている

だって、人が狩りをしている最中にポーチから道具盗んだよ　一回、ほんとに死にそうなときに秘薬を盗まれたときは本気で怒り狂ったけど…（みんなには、内緒だよ）

アイルー「前に、何かいるニヤ」

リユノ「えっ？」

私はネコタクから顔を出して前を見る…確かに遠くに何かいる四足歩行だから牙獣種かな？

アイルー「どうしますかニヤ？」

リユノ「…うん、この先の道で下に下っていつでも目的地には着くからそっちから迂回しよ…ツ…！」

紅葉「…どうした…？」

リユノ「…アイルーちゃん…　あのモンスターとつくに私達に気づいてる…」

アイルー「ニヤツ！？でもあのモンスターがいるところまではまだかなり距離があるニヤ…！あんなもんレウスでも、気づかないニヤ…！」

リユノ「でも、殺気が、完全に私達の方に向いてる…しょうがない私が囷になるからあなたたちは逃げて…」

栞「でも、大丈夫なの！？」

リユノ「うん！大丈夫だよ　絶対に死にはしないからね　（それに

楽しそうだし……」

紅葉「……じゃあ、任せた」

……紅葉、ちよつとは心配して 私、一応女の子だよ……

アイルー「じゃあ、一旦止めますニャ……」

そういつて、アイルーは手綱で操っていたガーグアを止める

ガーグアつて旨そうだなあ……

リユノ「じゃあ、行ってくるね 私は」

栞「無茶、しないでね……」

うう……さすが栞 こんな純粋な子初めて……なのに

良、蓮、紅葉「……がんばれ」「」

……あとで、お仕置きしよ

そんなことを考えているうちにネコタクは走り、そして見たことのないモンスターもこっちに走ってくる

リユノ「フッフツ 興奮してきちゃった さあ、楽しませてよね」

しかし、目の前で信じられないことが起こった……

それは……

モンスターが走っているネコタクに突進したことだった……

第6話・続、雨に打たれる孤高の狼（後書き）

皆さん、ついにジン○ウガが出ました
もちろん、ゲーム通り、リユノはジン○ウガのことを知らない（だ
って、ユクモ出身じゃないからね）

さて、みなさんに聞きたいことが一個だけあります……

それは

保存ってどうやってやるんですか…？（ボソッ）

いや、だって私今回の作品が初めてだし、
でも、知らなきゃ消えたときゃばいし、
というわけなんで、知っている方がおりましたら教えてください、
よろしく願いますm（——）m

さて、それではみなさん次話も期待せずにご待っていてください

それでは、チャオ！

第7話：現る！！“無双の狩人”（前書き）

こんにちは！！Mt・KOBURAです。

特に話すことはございません！！

……あつ、やめて……石投げないで……殴るのはもっとやめて……

だ、だって話すことはなんもないんですよ？

……なんなら僕の自慢話でも……

……あつ、やめて……石投げないで……殴るのはもっとやめて……

さあ、冗談はやめてwwさっさと本編にいきましょう！！

それでは、第7話：「悲しき運命」
始まり始まり〜

第7話：現る！！“無双の狩人”

リユノside

……クソッ！！クソッ！！クソッ！！クソッ！！クソッ！！
くっ！！どうして私は…こんなところで…

あれは、完全に私のミス　あのモンスターの殺気が完全にこっち
に向いていたからそのままネコタクを走らせてしまった…

……傲っていたのかもしれない　無駄に力を求めすぎて…

……あの子たちは無事だろうか
今もアイルーがネコタクの前で必死に木の板を退かそうとしている
しかし、アイルーは人間の子供と同じくらいのサイズなので木の板
は一向に動かない

と、そのとき……

紅葉「…っ、だらあ！！……」

紅葉がネコタクの残骸からでてきた

………よかった………

………じゃあ、他のみんなも…

蓮「うっ………」

良「くっ！おい、みんな大丈夫か！？」

葉「…う、うん　私は大丈夫…夫…キヤアツ！」
っ！…しまった！…モンスターがもう、間に合わ…

紅葉「リユノ…！」

紅葉「？」

紅葉「なんだよ！…このザマは！…」

うっ…！…

紅葉「てめえ、この程度なのかよ！…もう、間に合わないからって…」

…

紅葉「仲間を見捨てんのか…！」

…

紅葉「てめえはこの程度か！…それとも自惚れていたただけか！…」

…紅葉…

紅葉「言ってみろ！…てめえは…」

…

紅葉「仲間を見捨てんのか！…？」

…フツ…

リユノ「そんなわけ…ないでしょ？」

紅葉「フツ…世話のかかる…」

ふふ　そうだね…忘れてたよ　昔の思いを…

今では、戦いで楽しむことしかしなかったけど…

人命救助なんて二の次だと思っていたけど…

「私、人を助けるためにハンターになりたい！」

あの頃の気持ち…

久しぶりに…

表に出してみるか

リュノ「紅葉!!」

紅葉「……………」

リュノ「まずは、一個目……………」

紅葉「……………」

リュノ「私に意見を言うのはこれで最後……………」

紅葉「……………」

リュノ「それともう一個……………」

紅葉「……………」

リュノ「…ありがとう!!……………」

紅葉「……………どういしまして……………」

リュノ「……………」

紅葉 side

俺がリュノに激をとばした後、頭の中に思念のようなものが流れ込んでくる

赦さぬ……………」

紅葉「つ!……………」

栞「何?今の!?」

蓮「……………」

良「あ、頭が……………」

みんなが、この現象を不思議に思っているが、そんなことお構い無しに思念が流れ込んでくる

貴様らは消す…

紅葉「……消す……だと……？」

蓮「まさか……」

良「こいつか!？」

そんなことを言っているうちに目の前に“それ”はやってくる

でかい巨体 鋭い爪 王者の風格を表す角 そして、なにより……

背中を無数に飛ぶ雷光虫……

菜「ねえねえ、私、やっとジンオウガ倒せたんだー!!」

そう、それこそ……

紅葉「……ジ、ジン……オウ……ガ……」

無双の狩人はただ、そこに立つ……

第7話：現る！！ “無双の狩人”（後書き）

はい、みなさん！！

ついに、ついに、ついに、

きちゃいましたよ〜ジンオウガ！！

さあ、このジンオウガ、なにやら特殊な能力
がありそうですが、一体何なのか…

主人公たちもどうなるか…

次話で、ついに主人公が…

ではでは、第8話 とくとお楽しみに〜

第8話：悲しき運命（前書き）

こんにちは

M t · K O B U R A です。

第6話の後書きにて主人公になにかあるんじゃない？っ的なことを書いていたんですけど第7話ではジソオウガが出ただけで特に何も起こりませんでした
すんません m () () m

でも、今日はあります。 ……うう…

グスツ……………さあ、第8話、参りましょう

では第8話：「悲しき運命」
始まり始まり〜

第8話・悲しき運命

????視点

……まずは、奴か……

……

……この程度で死ぬことはないと思うが……

……

……ククッ……死ねばいい……

紅葉side

俺たちにリュノという希望とともに舞い降りた絶望

こいつはよく、知っている

ゲームじゃ、大剣一本で簡単に倒していたが、こっちの世界じゃ勝手が違う

あの角を、あの爪を見るだけで

俺たちには、絶望という重い2文字がのしかかる

紅葉「くっ!?!……」

クソッ！！こんなところで立ち止まっている場合じゃない
でも、足が…………震える…………

そんなことを考えていると完全にその巨体が目に見えてくる

クソッ、こんなデカいのかよ

やっぱゲームじゃ、本物のデカさなんてわかんねえ…………

あゝあ、今度こそ終わりか…………

その時、突然横から黒い槍みたいなものが飛んできて、ジンオウガ
の右前足に刺さる

いや、あれは…………太刀か？

っ！ことは…………

リュノ「みんな、大丈夫？」

リュノか 助かった…………

フツ…九死に一生を得るとは、まさにこのことか…………

リュノ「…………紅葉…………」

紅葉「なんだ…………」

リュノ「…………私を焚き付けておいて自分は諦めるとか、しないでね」

紅葉「！！…………ああ、そうだな…………」

そう言つて俺はジンオウガに視線をやると、既に太刀はジンオウガ
の右前足から抜けていた

…………強いな…………

俺らに気づかれず、太刀を抜き、落とした音さもわずか……

ちっ！！リユノはともかく、俺たちじゃ……

リユノ「みんな！！」

「……？」

リユノ「私が囿になるからあなたたちは逃げて、早く！！」

栞「で、でも……」

栞が止めようとするが、リユノは笑って……

「大丈夫！必ず追いつくから！！」

そう言つてリユノは満面の笑みをこちらに向けるが……

時、既に遅し

ジンオウガの爪が、上から振りかぶってくる

狙いは………栞か………

ちくしょー………

そんなことを考えてながら、俺は栞を突き飛ばす

栞「キャッ！！」

よし、これで栞はリユノが引き付けている間に逃げれるだろう……
……だが、………

ドガツ!!

紅葉「グアアアアアツツ!!」

俺は、ジンオウガの太い腕に吹き飛ばされてしまった

幸いにも爪で引き裂かれなかったが、骨が数本折れたし何より……

地がなくなった……

正確に言えば、俺の身体は吹き飛ばされたことによって、崖の外に吹き飛ばされてしまったのだ

紅葉「くっ!!……」

蓮「紅葉!!」

蓮が手を伸ばしてくるが、もう届かない

……だから……

紅葉「お前ら!!」

良、蓮、栞「!!?!」

紅葉「……死ぬな!!……」

そう言っただけ俺は落ちていく……

栞「……っ、紅葉おおおおお!!……!!」

悲痛な叫びはただ空を舞う……

第8話：悲しき運命（後書き）

登場人物紹介 f i l e

名前：赤羽 栞

年齢：15歳

誕生日：6月13日

血液型：B型

基本的には明るい天真爛漫な少女。友達も多く昔から告白や、モデル勧誘が多いことに悩んでいる。しかし、最近は好きな人ができてどう告白すればいいかを悩んでいる。学力はお世辞にもいいとは言えない。

ふー、いやー来ましたねー

主人公崖から転落というね

紅葉「おい!!」

作者「うわっ!?!なんだよ!!」

紅葉「お前、どうする気だよ!!」

作者「あー、大丈夫大丈夫！いざとなつたら、チーと能力いっぱいつけてあげるから（もちろん、嘘ですwww）」

紅葉「……嘘だな……」

作者「ギクツ！！」

紅葉「で？どうする気だ！！あぁっ！！！」

作者「（こゝ、怖い）（）（）（）（）（）（）（）（）（）だ、大丈夫だよ……ちや、ちゃんとやるから……」

紅葉「ふーん、まあいい……」

作者「（ホツ）」

紅葉「だが！！！」

作者「ビクツ！！」

紅葉「俺の仲間を少しでも傷つけてみる……ただじゃ、おかねえ……」

作者「は、はいいいいい！！！」

紅葉「……じゃあな……風邪ひくなよ……」

作者「は、はい！！……あれっ？なんかさっき……ま、いつかでは、皆さんまた次回……」

紅葉「（一応、あいつも作者だからな……機嫌をとっておかないと……」

1 () ...

第9話：君死にたまふことなかれ（前書き）

はい、今晚は〜！Mt・KOBURAです！！

すみません　いつつも1日か2日で投稿していたんですけど今回は短いくせに5日もかかりました。

べ、別に面倒くさがって執筆しづつてたわけじゃないんだからね！！

……はい、すみません調子にのりました…

さて、話は変わりますが今回のサブタイトル、ある人の名言？なんですが分かりますかね？

正解は後書きで書いておきます！！

では第9話「君死にたまふことなかれ」
始まり始まり〜

第9話：君死にたまふことなかれ

紅葉 side

.....

.....不思議だ.....

落ちていくのが、長く感じる.....

まだみんなの顔が見える.....

はっ、泣くなよ！俺がこの程度で死ぬかよ.....

.....でも、下に何か感じる.....

……何か邪悪な……そう、さっきのジンオウガよりももっと深い底にある暗闇を……

……それでも、俺は生き延びる……あいつらに生きろって言ったもんな……

さて、ここからは俺一人だけの世界だ……まずは……そうだな……村を見つけてハンターにでもなってあいつら探すか……

……まずは、下にいる奴をどうにかするとしましょうかね……

菜 s i d e

……紅葉……

どうして……私を庇って落ちた……

そうだ……

……私のせいで……

貴様のせいだ……

……私は……どうすれば……

……その心臓を捧げよ……

蓮side

ちっっ!!この状況どうすればいい!!

栞も紅葉が落ちてからどっかに意識が飛んじまってるしよー!!

それにあのジンオウガ 栞一直線に何か思念を飛ばして負の感情を増幅させていやがるのか!?

まずいぞ、このままじゃ……

リュノside

リュノ「ハアアアア!」

リュノの斬りつけた箇所から血が吹き出る

しかし、ジンオウガはそんなことお構いなしにリュノに攻撃をする

リユノ「くそ！！何なのよ！？このモンスター！！」

蓮たちと違いリユノはこのモンスターを知らない

そもそも、リユノはドンドルマという町を拠点に狩りをしていたが、ドンドルマ付近にジンオウガは出現しない

リユノ「弱点も分からないし何よりこの雨が…」

雨が原因でリユノは太刀をうまく握めない

逆に雨のせいで奴の雷に感電という脅威まで生まれてくる

何百ボルトの電圧だ…感電なんてしたらひとたまりもない……………
くっ！！このままじゃ……………

???「ニャー—————！みーなーさーん—————ニャー—————
！！！！！」

ん？これって…………まさか…

闘いながら一瞬下に目をやると…

アイルー「ご無事ですかニャー—————！」

…アイルーちゃん！！ナイスタイミング（＾o＾）ノ

よし、こうなったら…

リユノ「みんな！！飛び降りて！！」

良「ハアツ!？」

リユノ「いいから…早く！！」

良「で、でも……………」

蓮「行くぞ、良…お前は栞を担いで降りろ…」

良「ハアツ!？蓮…お前、本気で…」

蓮「どのみち、助かるにはそれしかないし、ここから飛び降りても死にはしないし…」

逃がさん!!……

蓮「敵さんもああいつてることだしな……」

良「うっ……」

「いまだに尻込みする良に蓮はある禁句を言う」

蓮「……なんだ……お前……怖いのか？」

良「カチンッ!!」

蓮「ニヤッ……」

良「はっ!!上等だ!!俺に怖いもんなんてありやしねえ!!」

蓮「そうかい……じゃ、行くぞ……」

良「オウッ!!」

「そう言つて、蓮と良（栞を担いで）は崖から飛び降りる」

その直後……

バキッ!!

というにぶい音と……

「ニャー……!!」

という猫の叫び声が聞こえたという……

リュノ「よし!!これで……」

「リュノは言うのをやめて全神経を敵に向ける」

逃がしたか……しょうがない……

ゾオツと敵の全身から濃密な殺気が溢れだす

貴様を殺る……

リユノ「ちっ！！……こりゃ追い付くのは無理かな……」

本当の戦いは今始まる……

蓮 Side

俺たちは今、ネコタクで“ある村”に向かっている……

そう“ユクモ村”だ……

まさかこんなとこまで原作とリアルとはな……

……にしても……

栞「紅葉……紅葉……」

栞、どうしようかな……

紅葉が崖から落ちてからずっとあの調子だ……

良もこころなしか少し元気がなくなっている……

まあ、しょうがないよな 目の前で親友が崖から落ちるのを見た
らそうなるのも

……ましてや、自分のせいだと思っただろうけど……
でも……

蓮「……栞……」

呼び掛けても栞は一向に反応を見せない

蓮「いつまで、呆けてるつもりだ……」

そう言っても、まだ上の空を向いたままだ

蓮「……まさか、紅葉が死んだとでも思っているか?…」

栞の眉が若干動いた…おつ、これは有効か?

蓮「フツ、悲しいね……親友なのに簡単に死をみとめちゃうなんてさ…」

良「お、おいれ「だって…」栞?」

ここでようやく栞が口を開く

栞「蓮も見ただでしょ?……紅葉が落ちていくと…」

蓮「……ああ…」

栞「っ、だったら!」

蓮「………」

栞「どうしてそんなに平然としていられるの!?!」

蓮「………」

栞「ふ、ふつうはし、親友が崖から落ちてくところ、見たら…泣き崩れるのに…」

蓮「………」

栞「どうして、そこまで普通でいられるの!?!」

栞 side

私は良や外のアイルーにも聞こえるのをお構いなしにぶちまけた

栞「ねえ、どうして…?」

蓮「………」

栞「………なんとか言ってよ………」

蓮「………」

栞「………なんとか言ってたら………」

蓮「………」

栞「………ねえ!」

蓮「………」

栞「なんとかいつ「だってさ…」

ようやく蓮が口を開く

蓮「親友だから？」

栞「…えっ？」

蓮「だからさ、親友だから平然としているのさ」

栞「そ、そんなの何の答えにも…」

蓮「なってるさ…」

栞「……」

蓮「親友だから信じてんだ…あいつが生きてることを……」

栞「!!」

蓮「俺はあいつの死体を見るまでは絶対に死んだとは言わねえし、死んだとも言わせねえ!!」

蓮は自分の思いをありったけにぶちかます

良「蓮…お前も同じだぜ…良!!」

蓮「それでもお前らはあいつが死んだと言うのか!!」

良「蓮……」

栞「……」

良「ニッ!!」

良も自分の思いをぶちまける

良「んな訳ねえだろ！あいつが死ぬところ？逆に見てみたいね！……
そうだよあいつが死ぬわけがねえ！！そうだ、死んでねえだよあいつは!!」

良はそう言って高らかに笑いだす

蓮「ニッ!!で、お前は？」

栞は涙を拭いて蓮にこう言う

栞「そんなわけないでしょ！私は紅葉を信じてるもの！！」
栞も自分の本当の思いをぶちまける

蓮「ニッ！！そっか！！……ハッハッハッハッハ！！」

良「ハッハッハッハッハ！！」

栞「アハハハハ」

三人の笑い声は外で運転しているアイルーにも聞こえた
それを聞くアイルーも何故かとても嬉しい気持ちになった

絆は再び離れた信頼を取り戻す…

第9話：君死にたまふことなかれ（後書き）

はい、第9話も、無事に終了しました！！

あつ、ちなみにもうすぐ第1章の「別れ篇」も完結しますんですぐに投稿したいと思いまーす！！

さあ、みなさん前書きで言った質問の答えわかりましたか？

正解は与謝野晶子の有名な言葉です

まあ、言葉というより与謝野晶子が詠った有名な反戦歌なんですけどね

ちなみにこの反戦歌、晶子が戦争に行った弟のために死んでほしくないと詠ったものなんでふ。みなさんわかりましたか？

誤字じゃないからね！

さて、皆さん次回第10話

とくと、お楽しみに〜

第10話：別れた道（前書き）

今日は！！Mt・KOBURAです。

いや〜、寒いですね〜（TOT）私非常に寒がりなので参ったものです。

でもでも……もうすぐ冬休みだ〜〜い

とは言っても受験生なんでどうせ勉強なんだろうけど……

さあ、みなさん気を取り直して

第10話「別れた道」

始まり始まり〜

第10話：別れた道

ガタガタガタ……………

先程のジンオウガとの戦闘？から無事に脱出し、今は雨も上がっている

因みにジンオウガは閃光玉で目眩ましした後にはけむり玉をなげて様子を見たいたらまるで興味をなくしたかのように西へと消えてしまった（なのでネコタク内にはリュノ（寝ているぞww）と良たち3人）

蓮「ん？」

良「どうした？」

栞「何かあったの？」

蓮はネコタクが進んでいる方向を指差す

蓮「あれってさ、村…？」

良「え？」

蓮「もしかして、あれって……………」

リュノ「ユクモ村だよ」

栞「リュノ、起きてたの？」

眠っていたはずのリュノは寝ぼけながらも答える

リュノ「今さつきね……………それより思ったより早かったね」

蓮「そっか、あそこが……………」

リュノ「あれ？別の世界から来たって言ってたのにユクモ村のこと知ってるの？」

蓮「ん？まあな」

リュノ「ふ〜ん、まあ紅葉もジャギイとかドスジャギイのこと知ってたしねえ」

紅葉の話になる途端、ネコタク内の空気が一気に悪くなる。操縦しているアイルーまでもがヒヤヒヤするほどに。

……………でも……………

栞「大丈夫だよ。紅葉は生きてるって、ねえ？」

蓮「……………そうだな、あいつが崖から落ちたくらいで死ぬ筈がない。」
良「それって、人間やめてるよな……………でもそれには同感だ！」

みんな、それぞれの思いを言う。どうやら紅葉の死については微塵も信じていないらしい。

リュノ「そっか。……………で、君たちはどうするの？」

リュノは今自分が思っている最大の質問をぶつけたみた。けど……………

良「ああ、それについてはリュノが寝てる時に話し合っていたんだけどね……………」

良「ハンターになろうと思う」

たった一言だが、力強くはっきりと言った

リュノ「へへ、でもね、ハンターっていうのはすごい危険な仕事でね。私でも死にそうになったときはあるし、目の前で友人がモンスターに食いちぎられたりするのを見たことは何度もあるの。それでもやるの？」

リュノは優しい口調ではっきりと言ってくる。

蓮「それでも、俺たちはなるさ。それに紅葉を見つけるのも、元の世界に帰るための方法を見つけるのもハンターが一番都合がいいと思う。」

リュノ「ほんとにいいのね。」

蓮・良・栞「ああ（うん）。」

リュノ「そう……わかった。じゃあ、紅葉のことに関しては私も出来る限りの協力はするわ。」

あとは、そうね。君たちがハンターになったらハンターがなんたる

かを全部教えてあげる」

蓮「……よろしく。」

良「ああ、頼んだぜ!!!」

栞「うん、よろしくね!」

こうして3人はたった一人の親友のために辛く険しい道を選んだ

栞「紅葉、待っててね。必ず助けるから。」

????side

暗い森の奥深く、一人の青年がなにかしら独り言を言っている。
????「あゝ、いてて。やっぱりあの高さから落ちたら痛いわな」

ザンツ!!

謎の青年が独り言を言っていると、すぐ近くに大きな音が鳴り響く。

漆黒の身体、左右の鋭い刀翼、赤く光る目

「……ナルガ……クルガ……？」

異端者が！！赦さん！！殺してやる！！

“迅竜”ことナルガクルガが強烈な殺気をぶつけてくる。

対する青年の方は、

「……ヒュ、中々の殺気だ……でも、俺には仲間がいるんでね。死ぬわけにはいかない。」

両者ともに戦闘状態へとなる。

「……」（待つてる、みんな。必ずこいつを倒してみんなで……）」

ガアアアアアアアアアアアツツ！！！！

ナルガクルガが殺気をぶつけながら突進してくる。

それと同時に青年も近くにあった木の棒をとって応戦する。

暗い森の奥深くにて、二つの鼓動が互いを消すためぶつかり合う

みんなは一人のために
一人はみんなのために……

第1章「別れ篇」

〽完〽

第10話：別れた道（後書き）

登場人物紹介

file 4

名前：村地

蓮

年齢：15歳

血液型：O型

誕生日：4月15日

メンバーの中で一番冷静沈着な存在。紅葉が囿になると言った時、一人だけ紅葉を見捨てるような発言をしたため、非道だと思われるが、それは仲間を信頼してのことである。作者が思うに4人の中で性格や口調が一番はつきりしていない（二番目は紅葉）

第1章、終了~~~~~!!!!!!

いや、ついに終わりました。

次からは第2章「修行篇」開始しますのでよろしくお願いします。

あと、できれば次話で挿絵をいれたいので機械音痴の作者が理解できるほど簡単であれば、おれたいと思います。

それではまた、次話にてチャオ

第11話：ギルドマスター兼エロジジイ（前書き）

こーんにつちはー！ー！！

M t・K O B U R Aでー！ーす！ー！！！！

ハアハア…：すいません、今めっちゃテンション高いです。

だって、みなさん！！やっとなMH3Gが買ったんですよ！！そりゃ、テンションも上がります。

まあ、こんな無駄話は置いて（っ）ておいww（

それでは第11話「ギルドマスター兼エロジジイ」
始まり始まり〜

第11話：ギルドマスター兼エロジジイ

良side

スタスタスタ…

俺たちは今ユクモ村の集会所に歩を進めている。

リユノ「あつ、着いた着いた」

リユノはまるでお菓子を貰った子供のようにテンションが高い。

そう、この村はどうやら女の人に人気があるらしい。

なんでも、村から湧き出る温泉には滋養強壮の効果があつて、それがいくつもあるかららしいんだが……

リユノ「いや〜、さつさと任務終わらせて入りたいな〜」

……混浴はな〜……

いや、別に混浴が嫌だと言っているんじゃないぞ！！ただ、男としては“あれ”が立ってしまっただけ……

栞「何が“あれ”なの？」

良「うおお！！な、なんで俺の心の声を……」

栞「いや、バリバリ聞こえてたし……」

な、なんと!!不覚。……つーか、リュノと蓮がニヤニヤしているのがむかつく。

良「なあ、蓮。お前も分かるだろ。この気持ち」

俺はボソボソ声で蓮に聞く。

蓮「別に、女の裸なんて見飽きた。」

なににいいいい!!

蓮「ニツ、冗談だ。」

こいつ、殺してもいいかな…?

リュノ「ほら、みんな無駄話しないでマスターに挨拶しに行くよ！」

……蓮、いつか覚えてろ……

リュノside

「ほら、みんな無駄話しないでマスターに挨拶しに行くよ!」

全くみんなは子供なんだから。

ん、……殺気!!

リュノ「ハアアツ!!」

ペチーン！

甲高い音が鳴り響く。

「????」「ういゝゝ、ヒック。いてて、何するんじやいー!」

リユノ「うっさい、エロジジイ!!今私の尻さわろうとしたでしょ。

」

栞「リ、リユノ……その人は……?」

栞が怯えたような口調でリユノに聞く。

リユノ「ん?ああ、このエロジジイがこのユクモ村のマスターだよ。

」

栞、良「……ええええええええ……!!」

マスター「うるさいわい!!」

後日騒音でマスターが村人から怒られたのは言っまでもない。

第11話：ギルドマスター兼エロジジイ（後書き）

登場人物紹介 file 4

名前：リュノ・フラヌリーテ

年齢：不明

血液型：不明（医療技術が発達していないため）

誕生日：9月26日

身長：176cm

体重：非公開

夜刀【月影】を愛刀としている竜人族の少女。見た目は20歳前半だが、数百年は軽く生きているため、戦闘経験は豊富。ユクモ村には何かの任務で来たらしい？

はい、第11話も無事に終わりました。

今回からはあまり文字を多くせず読みやすいよう一行一行あけて書きます。

それと、登場人物紹介で栞、良、蓮の身長、体重が書かれていなかったなので、今書こうと思います。

栞 身長：162cm

体重：非公開

良 身長：173cm

体重：67kg

蓮 身長：176cm

体重：64kg

栞やリユノは女性なので体重は書きません。
これからも女性の体重は書かないと思います。
(例外がない限り)

では、みなさん！！

また次話にてチャオ

第12話：ハンター登録（前書き）

今晚は！！Mt・KOBURA でーーす！！

今日はドル装備を揃えようと下位のムロフシwwに行ってきました！

僕は基本大剣使いなんですけど、今作品からは太刀を使って頑張っています。

……なのに、なのに！！

村 5のラギア捕獲クエで三乙ってなんやねん！！

水没林狭くてほんとやんなるわー！。

さて、そんな無駄話は置いといて

第12話：「ハンター登録」

始まり始まり

第12話：ハンター登録

良side

……俺達の目の前で起こっているショートコント、一体どう突っ込めばいい？

リュノ「だから、いつまでも女の尻ばっか追いかけてんじゃないわよ！！もうあんた800年以上は生きてんでしょ？」

マスター「たとえ何年い生きようと女の尻だけは……」

リュノ「ふざけんな！！」

バキッ！！

マスター「ギャフツ！！」

リュノ「あつ、ラッキー　気絶した。…すいませーん？」

受付嬢「はあーい！！」

リュノ「この“汚物”どっかに捨てといて下さい。」

受付嬢「ニコッ　分かりました。なんなら火竜の巣にでも……」

マスター「待て待て待てえええーい！！」

リュノ・受付嬢「ちっ！！」

マスター「なんじゃ！！舌打ちなんぞしおって！！……んで、今日はなんで来たんじゃ？」

リユノ「あれ？マジメになった。」

マスター「ワシは至ってマジメ二じゃい！！」

良「たくっ…いつまでこのショートコント続けるつもりかよ…」

マスター「うるしやい！！そこのガキ！！」

良「あ！！んだと、このジジイ！！」

マスター「なんじゃ？やんのか？ヒック…」

良「ああ、やってやるよ！！」

リユノ「ちょ、ちよつと二人とも…」

良「止めんな。リユノ。」

マスター「男どうしの戦いじよぞい。」

リユノ「いや、そうじゃなくて…」

良「行くぜ！！」

マスター「ウリヤアアアア…ヒック…」

1分後……

そこには再び横たわっている醜い汚物がいた。

良「……よわっ!？」

リュノ「バカね。マスターも、酒に酔った状態で勝てるわけないでしょ。」

マスター「うう……ヒック……」

リュノ「さて、こんなバカは放つといてさっさとハンター登録しましょ。」

そう言ってリュノはクエストカウンターまで行って、受付嬢と話している。

良「あっ、おい待てよ。」

リュノside

いや、今日はいい日だね。あのエロジジイが召されるとは。

リュノ「ねえねえ、受付嬢さん。」

受付嬢「はい。」

リュノ「あの子達3人の、ハンター登録したいんだけど」

受付嬢「はい、分かりました。」

そう言つて受付嬢は机にある書類をみんなの前に出す。

受付嬢「じゃあ、この書類を書いたらまた話しかけてください。」

栞「え？こんだけで？」

リュノ「うん、そうだよ。」

蓮「何か入隊試験みたいなもの？」

リュノ「ううん、そんなの無いよ。」

良「へえ、こんだけでね、ん？」

良が今見ているのは使いたい武器項目だ。

良「……なあ、みんな。」

栞「ん？」

蓮「どうした？」

良「ここのとこなんだけどよ、やっぱりね……」

良は二人に向かってゴニョゴニョと話をしている。というより何か

提案してるような。

良「なっ、いいだろ！」

栞「うん、それでいいよ。」

蓮「別にいいぜ。」

リュノ「……終わった？」

良「おう、もういいぜ。」

受付嬢「終わりましたか？ふむふむ、成る程、ハンマーに双剣に弓ですか。なかなかいい組み合わせですね。」

受付嬢が下の書類を何かのカードに書いている。

受付嬢「終わりました。これで3人とも今日からハンターです。」

3人は今この瞬間ハンターとなった。

第12話：ハンター登録（後書き）

感想、ご指摘お待ちしております。

第13話：迫る脅威（前書き）

新年明けましておめでとございます！！

M t・K O B U R Aです！！

いや、本当は0時ちょうどに投稿したかったのですが、ガキ使が面白すぎてつい忘れてしまいました。

僕がガキ使を見て一番面白かったのはC A対抗戦で松本が真島の尻に押し潰された時ですね。

僕はその時、歯を磨いていたのですが、思わず嘔きそうになりましたw w w

あそこでc mがなかったらマジで嘔いていたと思いますw w

さあ、それでは第13話「迫る脅威」
始まり始まり〜

第13話：迫る脅威

菜side

私たちはハンター登録を終えて訓練所に向かっている。

リユノはあのマスター？さんと話があると言って後で行くと言っていた……けど！

なんかすごい嫌そうな顔をしていた。なんでだろう？

蓮「ん？あれじゃないか？」

蓮が指差した所を見ると金色の装飾が入っている門があり、そこに“訓練所”明朝体で書かれてあった。

良「なんだ、ありや！？ゲームと全然違うぞ？」

良の言う通り本当に違っていた。ゲームだと道や階段には木の葉が至るところにあったあの訓練所とは違い、木の葉などはなく門には金色の龍が左右対称の装飾があった。

蓮「……！誰か来るぞ。」

前を見ると確かに人影が見える。もしかして……

????「むっ？誰だ！？貴様らは!!！」

その人影は濃ゆい顔をし、眉毛が太く顎がくつきり割れたオッサン

だった。

……………なんで？……………

リユノside

私は集会所内にあるマスターの部屋にいた。にしてもすごい部屋だな…。周りに酒しか無い。これでもユクモ村のギルドの最高責任者の筈なんだけど……………。

マスター「んで、話ってなんじゃい？」

目の前の汚物が喋ってくる。ムカつくな、コノヤロウ。

マスター「今なんか失礼なことを……………」

リユノ「わーわー、ううんなんでもないから！何も考えてないから！」

なんて洞察力だ。このエロジジイ……………。

リユノ「そんなことより、今から話すことはギルドの上層部には内緒ね。」

マスター「そんなに重大なことか…………？」

リユノ「うん。あつちに知られると厄介だから。」

マスター「……………分かった……………。話してみる……………。」

さすがのマスターも真剣だ。あんな呑んだくれなのにね。まあ今は酒が抜けてるから大丈夫か。

リユノ「実はあの子達のこと何だけど……」

それから私はあの子達のことを全て話した。異世界のことについて。

そして粗方、話終えると……

マスター「そうか。やはりか。……また起きるのだな。“太陽の厄災”が……。」

リユノ「多分……そのせいかここに来る途中でジンオウガに襲われたわ。」

マスター「この付近にか!?!……となると出てきたのは“アマツマガツチ”か。」

リユノ「ほぼ決定事項よ。どうするの?」

マスター「そうじゃな。……まずは、このことについては秘密事項じゃ。絶対に他言してはならん。……それと……」

マスターは一息ついてこう言った。

マスター「十二戦士を呼ぶかの…。」

菜side

目の前に現れた謎のオッサン。ていうかほぼ確実に教官だと思うけ

どね。

良「んで、誰よ？お前。」

良「一応年上だよ。でも年上でも敬語を使わないのが良らしいんだけどね。」

教官「フン！私はこのユクモ村訓練所の孤高の教官ゴールドーだ！以後覚えておくように。……それで、お前は？」

蓮「申し遅れました。僕は村地 蓮、こっちにいるのは鳥田 良と赤羽 栞です。」

良「…よろしく。」

栞「よ、よろしくお願いします。」

教官「むっ？お前ら、今日ここに来たのか？」

蓮「はい、そうです。それがなにか？」

教官「むっ？いやなに、今日村長から聞いたんだが娘が久しぶりに帰ってくるらしくてな。それでさっき来た伝書鳩に“3人追加”と書かれてあったからな。まさか君たちか？」

………ちよつと待って。今この人、娘って……

良「……なあ、オッサン。その娘の名前ってなんて言うの？」

良がみんなが今一番疑問に思っていることを聞く。頼むからあの人

ではありませんように。

教官「何って、……“リュノ”だが？」

………なんで………!!!

数秒後、3人の悲鳴が村中に響き渡った。

第13話：迫る脅威（後書き）

イエーイ！リュノの父親登場！！パフパフ！！

というわけでやっちゃいました！！まあ、新年なんて無礼講ということぞ。

最近、更新速度が遅いのもっとがんばります。

それでは今年もよろしくお願いします。

チャオ

第14話：ただ一人のために（前書き）

今日は！！Mt・KOBURRAです。

今日はブラキディオスとジエンモーターンに行ってきました。

にしてもさすがブラキディオス！パッケージモンスターの中でも歴代最強と言われるのがよく分かりました。

1戦目は1乙しながらも、何とか勝ったのですが、2戦目は油断して3乙してしまいましたww

でもブラキの太刀は欲しかったので、防具を変えようと思いジエンに行ってきたのですが……

何なんだ、あの体たらくっぷりは！！

一瞬本当にモンハンかと疑いましたよ。なんか3rdより弱い感じがしたので。

でも防具はそれなりに優れているのでさっさと集めたいと思います。

（上腕甲が出ないww）

さあ、それでは第14話「ただ一人のために」
始まり始まり〜

第14話：ただ一人のために

良side

教官「何って、……“リュノ”だが？」

……えーーーーー!!!!!!

な、何だと！？俺の聞き間違いか！？

教官「にしても、早くリュノちゃん来ないかな〜 ムッフフ〜」

……キモい。

目の前のリュノの父親と言うオッサン。果たして本当なのか……

リュノ「一応戸籍上はそっだよ。」

うおおい！！来てたのか！！リュノ！！

リュノside

私が話が終わって訓練所に向かっていると、門で口論している3人とバカ。

はあ、またいつもの癖が……

良「（目の前のリュノの父親と言うオッサン。果たして本当なのか

……）」

リユノ「一応戸籍上はそうだよ。」

良ってさ、前から思っていたけど心が読みやすいよね。ここまで読みやすいのも貴重だけどさ。

蓮「もう終わったのか？」

リユノ「うん。案外早く「リユノ……私の許可無しに男とイチャイチャ……」黙れ……はい……」

栞「ねえねえ、どんな話だったの？」

リユノ「ううん。ほんとにちょっとしたことだから……それより……」

教官「リユノ……ノー……！……た……だ……い……い……ま……へ
ブシツ……！」

リユノ「うるさいな。喋るなよ、このゴミが……。」

横から私めがけて飛んできたゴミを裏拳で倒す。うん、これは正当防衛だからしょうがない。

栞「リユ、リユノ、そのだいじょう……」

リユノ「さて、それじゃ早速中に入ろうか。」

栞「（無視した!?!）」

リユノ「ああ、それとその「……」

教官「は、はあい……。」

リユノ「今からドンドルマまで走って買い物してきて。ネコタクは使わずに。」

教官「夕飯か？ならユクモでも別に……」

リユノ「あつちでしかと 獲れないものもあるの。ホラ早く！」

教官「し、しかし走ってなど……」

まだ渋るか、こいつは。なら……

リユノ「ねえ、お願い。私の世界一愛するパ・パ……」

そう言っただけで私はゴミの耳に息を吹きかける。本当はやりたくなんかないけどね。

教官「フオオオオ……！！行かせていただきます。」

そう言っただけでゴミは敬礼のポーズをとる。このまま奴隷にでもなってくれればいいものを……。

リユノ「じゃあ、早く行ってきてね。」

教官「はあい！！」

そのまま教官は訓練所に戻り、財布をとって、身だしなみを整え、髪をセットし、道中モンスターに襲われても大丈夫なように武器を

とる。そのまま死んでくれればいいのに……。

教官「いつてきまーす!!!」

そうして30秒で準備を終わらせ村の入り口まで走っていく。

リュノ「よし、これで1週間は帰ってこない。」

栞「ははッ。」

栞に関してはもう苦笑いしかないらしい。まあ、目の前でこんなことを見せられたらこうなるのも可笑しくはない。

リュノ「さて、じゃああなた達も修行、始めよっか。」

良「えっ?もう、やんのか?」

リュノ「そっだよ、もう修行内容も考えたしね。」

良「ま、待てよ!まだ心の準備が……」

リュノ「早く紅葉助けたいんですよ?」

良「!?!」

リュノ「あなた達が早く強くなって、紅葉を助ける。そのためにあなた達を私が強くしなくちゃいけない。」

リュノの話は淡々と進んでいく。

リユノ「それに紅葉のことを考えると、早くしないと生存率はドン
ドン下がっていくよ。…それでもまだ渋る気？」

リユノは3人は問いかける。しかし3人とも答えは既に出ていた。

良「ハッ、当たり前だろ！！俺たちが立ち止まったら、それでこそ
終わりだ。」

蓮「……異論なし。」

栞「うん。早くやろう！」

リユノ「(ニコツ)じゃあ早くやろうか。ついてきて。」

そう言ってリユノは門をくぐって前へと進んでいく。それについて
いく3人。

3人の絆は再び強くなった。

いや、訂正しておいじ。

“ 4人 ” の絆は更に強くなった！！

第14話：ただ一人のために（後書き）

話が一向に進まない。

感想、ご指摘お待ちしております。
それでは次話にてチャオ

第15話：まずは……相棒決め（前書き）

今日は！！Mt・KOBURAです。

今日、久しぶりに学校に行ってきました。

学診プレテストの結果は国語と社会以外は悲惨な結果に終わりましたww
たww

まあ、冬休みはだらけてたので当然ですね。

さあ、それでは

第15話「まずは……相棒決め」
始まり始まり〜

第15話：まずは……相棒決め

蓮side

俺たちは今、訓練所の中にある特別訓練室という場所に向かっていく。

それにしてもこの訓練所には驚いた。

最初、中に入った瞬間、目の前に広がったのは長い、長い、それはそれは時代劇に出てきそうな扉を開けたらまた部屋のなものを想像したくらいだった。

ここで少し解説に入ろう。

リュノの話によればこの訓練所の所有者のゴールドさん。

村人からは凄い妬まれているらしい。

何でもこの訓練所、元々村の外に広がっていた林を伐採し、そこに訓練所を建て無理矢理、村の領土を広げたらしい。

普通ならば村の領土が広がったのなら喜びだろうが、このユクモ村は温泉と温泉に浸かっている時に見える自然が何よりも売りだったらしいが林を伐採したお陰で、客が減って一時期、村が大損害を受けたらしい。

それ以来、リュノの父親、つまり教官ことゴールドーは妻と離婚。村

人からも白い目で見られるようになってしまった。

何故、ゴルドーが、そのような事をしたのかは分からない。

分からないのでリユノも父を嫌う。

今回の帰省についても、どうやら父に会いに来たのではなく、別の用件で来て、それが終わったら、さっさと、ドンドルマに帰るらしい。

因みに、ゴルドーの事を避けていないのは村長とギルドマスター、それと鍛冶場にいる竜人族の職人さんくらいだと言う。

リユノも3人は村ではそれなりの地位にいますので、何度か聞き出そうとしたらしいのだが、何回聞いても返事は「教える訳にはいかない。」としか返ってこなかったらしい。

それ以来、リユノは聞くのを諦める代わりにこの村と縁を切ったとか……

でも村人はリユノの事は嫌いではないし、リユノも縁を切ったと言っても村人達のことを真剣に嫌っている訳ではない。

そうでなかったら、俺たち諸とも村には入ること等出来なかったらしい。

はい、解説終わり！

リユノ「あっ！着いた、着いた」

解説をしている瞬間に目指していた場所に着いたらしい。目の前にはとてつもなく大きい鉄製の扉が広がっていた。

良「デ、デケえ〜……。」

栞「こんなの開けるの…?」

確かにこの扉は4人じゃ開けることは出来そうもないがその心配は杞憂に終わった。

リュノ「ああ、それは大丈夫。この扉、私一人でも開けられるくらいに軽いから。」

そう言っリュノは扉を前に押す。

ギギギギギツ……

おおっ、本当に開いた。俺もこれには、さすがにビックリした。

リュノ「でもね、この扉、みんなには開けられないんだよ。」

良「えっ?何で?」

リュノ「実はね、この扉、特殊な鉱石が使われていてね。人を覚えるの。」

なんだそりゃ?と言いたげな顔を二人ともしている。かくゆう、俺も意味がよく分からない。

リュノ「この扉にね、方法は分からないけど、人の手の感触を覚え

る事が出来てね。私が開ける時は重さは感じないんだけど、知らない人が開けようとしてもね、びくともしないの。」

蓮「聞いたことないな。少なくとも元の世界では、そんなものは発見されてない。」

リュノ「うん。そうだね。」

良「じゃあさ、どうやって覚えさせるの？」

リュノ「それがね、よく分かってないんだよね。」

栞「えっ!？」

リュノ「私もどうして開けられるのか分かんないよね。物心つく前にはもう開けてたって言ってたから。」

蓮「ふ〜ん…」

リュノ「でも、一人でも開けられる人がいたら意味ないんだけどね。」

良「へ〜、こんなんがあるなんてな。」

リュノ「うん、…さて、じゃあ早速修行始めるけど、その前に…」

「息こつ言った。」

リュノ「武器を決めてもらっつかな。」

良side

リユノ「武器を決めてもらっつかない。」

武器？

栞「えっ？もう決めるの？」

リユノ「そりゃ、もう。だって修行の中にはモンスターとの戦闘だつてあるからね。」

やっぱりあるか。へへッ、やっぱり戦闘が一番腕が鳴るぜ！！

リユノ「で、武器なんだけど、この中からえらんでね。」

リユノの行った武器とは……

大剣……圧倒的な破壊力が特徴だが、移動が遅いのが難点。

太刀……大剣を細くしたような剣。大剣よりも軽く早く動けるが、細い故にガードが出来ない。

片手剣……剣と盾、2つの武器を組み合わせた初心者ハンターから熟練ハンターまで広く愛用される武器。

双剣……片手剣の派生武器。盾を失くし、剣を一对に持つことで攻撃力を特化させた武器で集中力を研ぎ澄ますことで“鬼人化”が出来るのが特徴。

ハンマー……武器の中でも最高の火力を誇る武器。モンスターの頭に攻撃すれば、気絶させる事が出来る。

狩猟笛……ハンマーと同じ打撃系武器だが、旋律を鳴らすことで仲間に様々な効果を付与させることが出来る。パーティー戦では重宝させる。

ランス……長い槍と大きい盾。攻撃としては突くことを主体と盾はモンスターのあらゆる攻撃を防ぐ事が出来る。

ガンランス……ランスに砲撃機能をつけた武器。必殺技としては“フルバースト”や“竜撃砲”がある。

ライトボウガン……フットワークの軽い遠距離武器。威力は低いが一発の弾を複数にして撃つ“速射”機能がある。

ヘビィボウガン……一発一発は重いが、動きが遅くなる重量型遠距離武器。特定の弾を連続させて撃つ“しゃがみ撃ち”という技術がある。

弓……矢を引き絞り、複数の矢を一発で放つ“連射”や、横に拡げて撃つ“拡散”等があり、他にもビンをつけたり、鉛弾の入った袋がついた特殊な矢を上放って空中で破裂させ打撃属性を付与させる“曲射”がある。

あとは、最近開発された武器で“スラッシュアックス”というものもある。

スラッシュアックス……剣モードと斧モードを使い分けることができる武器。大剣、ハンマーに次ぐ高火力が期待できる武器。

以上の12種類がハンターが使う武器である。

ふむ、特にゲームと変わったもんはねえな。

リユノ「この中から選んで欲しいんだけど……どうするっ。」

さて、何にするかについてだが……

実はもう決めてある。

それは……

良「俺は“ハンマー”だ！」

蓮「俺は“弓”ね……。」

栞「私は“双剣”にする！」

もう3人とも決まっていた。

何故かというところ……

良「なあなあ、俺たちハンターになるんなら、武器も使うだろ！」

蓮「そうだけど、それがどうかしたか？」

良「いや、どうせ使うならさ……ゲームで使ってたのと同じやっつにしないか？」

栞「えっ!?!?」

良『いや、やっぱよ。どうせならさ今まで使ってきたもん、使えば
使い方もすぐに慣れると思うからさ……どうよ?』

蓮『成る程ね。別にいいんじゃない。』

栞『そうだね。じゃあそうしようか。』

良『おお、そっか!じゃあ、それで決まりな!決定!』

リュノ「ハンマー”に“弓”に“双剣”か……。うん!別にいい
んじゃない?」

良「お!マジか!」

リュノ「うん。バランスもとれてるしね。どうせ3人でパーティー
組むんでしょ?」

蓮「まあ、そういうことになるだろうな。」

リュノ「うん、じゃあ武器渡すね。はい！」

3人に渡されたのは

鉄鉱石のみで造られた“ツインダガー”

骨を主に造られた“ハンターボウ”

ハンターボウと同じく骨で造られた“ロックボーン”

リュノ「修行が終わるまではこの武器たちを使ってもらってからね。」

良・蓮・栞「「おう！（うん！）」「」

リュノ「うん、いい返事だね！じゃあ……」

リュノ「修行開始〜！！！」

訓練所に嬉しそうな声が高らかに鳴り響いた。

第15話：まずは……相棒決め（後書き）

感想、ご指摘お待ちしております。

それではチャオ

第16話：初狩猟……の筈が？（前書き）

今晚は！！Mt・KOBURRAです。

まずは、イセタイ（この小説の略）を読んでくださってる皆さまへ
お詫び申し上げたいと思います。

私の友達のオヒテノーさんから指摘いただいたのですが、サブタイ
トルが「上手に焼けました〜」と、「相棒決め」、この二つ
がゴツチャになっていて分からないと指摘されたので、直ぐに直し
ておきました。

申し訳ございませんm（――）m

さあ、それでは気を取り直して

第16話「初狩猟……の筈が？」

始まり始まり〜

第16話：初狩猟……の筈が？

菜side

修行が始まって直ぐに、私たちはチェーン装備という仮装備を貰った。

何でも、修行の中にはモンスターとも戦うからどうしても、らしい。

そして、遂にやってきた。モンスター狩猟が！

肉焼き、調合、採取等いろんな事を教えてもらい、それぞれに合格試験があつたのだが、どれも合格してここまで来た。

これと、あともう一つ試験を合格すれば、ハンターとしてクエストにも行かせてくれるらしい。

リユノ「はい皆さん、ちゅ〜うも〜く！」

今から次の修行内容を説明するらしい。何を狩るのかな？

リユノ「今から、闘技場にアプトノス3頭とケルビ3頭を放つので一人一頭ずつ狩ってください！」

アプトノスとケルビか。よし、それならイケる！！

私たちが闘技場の中に入ると、アプトノスとケルビの群れが見える。どちらともいきなり、こんな所に連れてこられたので困惑してるらしい。

蓮「俺から行く。」

良「あつ！？待てよ！俺から……」

良が言い終わるのを待つ筈もなく、蓮は一気に2本の矢を放った。連射である。

キュウウウイ！！

2本の矢は両方ともケルビに当たり、一本は右前足、もう一本は頭に当たった。

頭をやられて断末魔を上げながら倒れるケルビ。その顔は息を失っていた。

続け蓮はアプトノスに狙いを定め、一番大きいアプトノスに矢を放った。二本とも腹に深く刺さったが、死ぬまではいかなかった。だが……

蓮「終わりだ……。」

そついに終わると同時に矢はアプトノスの頭に刺さった。

さすがにアプトノスもこれには耐えられる訳もなく、断末魔を上げて倒れた。

仲間がやられたことから、さらに困惑するケルビとアプトノス達。しかし、逃げ道は何処にもない。

良「よし、じゃあ次は俺だ!!」

良は困惑しても尚動かないアプトノスに狙いを定めてハンマーで殴っていく。すると……

良「おっ?急に動きが鈍くなったぞ?」

アプトノスは何回も頭を殴られていく内に気絶して動けなくなってしまったらしい。

良「うおりやややー……!!!!」

良の渾身の溜め攻撃が入った。今ので気絶していたアプトノスの頭蓋骨が陥没して断末魔すら上げることなく死んでいった。

良「うっ……」

リユノ「どうしたのー?気分が悪いならちょっと休んでもいいよー。」

良「い、いや、大丈夫だ!問題ない!!」

良は強がっているが周りから見れば無理してるのは当たり前である。明らかに顔色が悪い。

しかし、それが今まで何も殺さずに生きてきた人ならば当たり前かもしれない。

私たちは今、生き物を殺している。モンスターでも生き物だ。同じ地に足を着き、同じ空気を吸っている。それを殺すのならばあな

るのも、当然かもしれない。

良「おおお!!」

そんなことを考えていると既にケルビも息絶えていた。

ゲームでは、打撃系武器で殴ると、気絶して剥ぎ取りしかできないけど、こつちの世界では違う。実際、ケルビの頭も殴られて原型が全く分からなかった。

良「ハアハア…終わったぜ…。」

リユノ「OK　じゃあ、最後は栞ね。」

栞「う、うん。」

私は双剣を構えてアプトノスに近付く。ちなみに、最後に残ったのは子供のアプトノスである。

キュウウ？

アプトノスがこちらを見つめながら、首を傾げてくる。どうやら、状況が飲み込めていないらしい。

栞「(ど、どうしよう。殺せないよ……。)」

しかし、油断していると必ず手堅い反撃がくる。

アプトノスは自慢のトサカで体当たりをしてきた。いくら子供でも大人と同じ体重だ。そんな一撃を食らったら、さすがに痛い。

良「栞の奴、どうしたんだ。急に止まったりして？」

蓮「……………」

リュノ「（うーん、やっぱり怖いよね。私も最初はそうだったからかあ。）……………どうしたのー栞？修行、中断するー？」

栞「だ、大丈夫！何ともないから。」

リュノ「（あんな、強がり言ってるけど本当は怖いよね。ここで剣入れてもなあ……………。）」

栞の手は震えていた。こんな状態で斬っても、恐怖は消えない。それでは、この修行の意味がない。

リュノ「（しょうがない……………）はい、修行を一端中止します。各自部屋へ戻るように。……………でも、栞は残ってください。」

栞「えっ!?!？」

リュノ「はい、じゃあかいさ……………ん」

リュノがそう言うと二人は用意された自分の部屋に戻っていった。

リュノ「ふっふっん さて、栞！」

栞「な、何？」

リュノ（ニコツ）今から個人指導よ!?!」

栞はその言葉を理解するのに数秒要した。

第16話：初狩猟……の筈が？（後書き）

感想、ご指摘お待ちしております。

それでは、チャオ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9619y/>

モンスターハンター ~異世界から来た太陽~

2012年1月9日02時47分発行